

第三百二十四回 青葉会

平成二十五年三月二十八日(木)

午後六時〜九時

丸紅来客食堂「談話室」

〈選者〉 ☆ 川合万里子 先生

〈出席者〉 石川清 今井紀久男 大林猛 小川恭延 柿崎忠彦 川口孤舟 小西弘子 豊田ゆたか

中野一灯 福島正明 山崎亜也

〈投句〉 伊賀山そらお 小早健介 朱牟田恵洲 土谷堂哉 古田昇 南平和夫 宮内規雄 山内天牛

渡邊盛雄

〈紙上選句〉 赤田堅 庄司龍平 高橋敏郎 橋口隆 早川允章 村田くに子 山崎青史 山内天牛 山本三恵

《選者吟》

亡きひとのままの表札彼岸入り 万里子 (猛・ゆ・灯・允・く・天)

ジョギングを映す内濠花筏 全 (恭)

迷子佇つ枝垂桜の真ん真中 全 (ゆ)

(身延山にて)

鴉らの人語ささめく空うらら 全 (紀)

空襲や地震を生き延び花の日々 全 (紀)

《互選句》

☆ 陽炎を咀嚼する牛草千里 孤舟 (万・堅・猛・恭・弘・ゆ・青・天)

七点 足摺の椿抜ければ海光る 堂哉 (猛・孤・ゆ・允・正・青・三)

(青：眼前に広がる大景が美事)

五点 酒蔵の甘く匂ひて春の昼 五郎太 (堅・龍・允・亜・天)

☆ キャンパスにあふるる袴花八分 一灯 (万・猛・龍・正・亜)

☆ 残雪や先づ目で登る西穂高 全 (万・孤・弘・ゆ・青)

四点 蛇行して孤城を衝けり雪解川 全 (猛・龍・允・く)

(豊橋の吉田城)

團十郎告別式

三点 精悍な遺影大きく花檣(しきみ) 紀久男 (孤・弘・龍)

☆ 引越しの友から「季寄せ」花の午後 全 (万・清・龍)

☆ 遅き日の晩酌待ち侘ぶ有馬の湯 堂哉 (万・堅・清)

☆ 霾ぐもりひねもすスリラー読みふける ゆたか (万・孤・正)

十寸見会於国立劇場

花吹雪音(む)締めの際に招かれて 正明 (堅・紀・く)

春の浜舟に目玉が描いてある 全 (灯・天・三)

富士五湖を終の住処に残る鴨 昇 (忠・允・青)

(青：句切れが良くないので「富士五湖が終の住処や残る鴨」としては?)

二点 白球を追ふ子等の声花盛る 清 (紀・く)

山好きをやるはり包む春の雨 全 (天・三)

花冷えや入院近き友と会ふ そらお (弘・隆)

都民芸術祭邦楽演奏会

舞台了へ花見せんとや半蔵門 紀久男 (灯・正)

再生を期する傘寿や風光る 恭延 (清・隆)

青空を覆ふ上野の花に酔ふ 全 (清・く)

部屋に干す下着繚乱黄砂かな 忠彦 (猛・亜)

雪中の墓を掘出す彼岸かな 全 (亜・天)

陽炎の地軸傾け熱気球 孤舟 (灯・正)

乾坤をくすぐつてゐる猫柳 全 (ゆ・灯)

句敵のぼちぼち鬼籍鳥曇 全 (忠・三)

疑義ただす浅蜷吐き出す真砂かな  
カッブ酒打ちて俄かの花の宴

☆湖昏れて明日発つ鴨の深眠り  
初蝶や封印された過去がある

早いねと妻持ち帰る山桜  
風車立つ庄内平野の斑雪

勝者にはミモザの冠女子マラソン  
心奥の揺るる日もあり西行忌

☆気紛れにおとなふ梅林野点受く  
花の寺で色即是空と写経する

山の友対話久しく山笑ふ  
☆産土神(うぶすま)に初音恵まる独り旅

雀来て万朶(ばんた)の桜チユをする  
桜木はつぼみ背負いて出番待

深川に吟響かせて春を呼ぶ  
☆仮の世は片道切符鳥帰る

☆花冷えや悲喜それぞれの知らせあり  
道へ寝る人の膨み桜散る

亀鳴くや粉塵砂塵の底に棲む  
花爛漫歌舞伎座開く日も近く

グルメなどでない幸せの目刺かな  
飯蛸や郷(さと)のこの味酒すすむ

散る花に幼児たわむれ花ほおに  
ふきのたう摘むスカーフの水浅黄

安定を求め乱れる雪柳  
春の夜黒い瞳が渦を巻く

(黒い瞳：銀河)  
スイトピー薄くうすうく咲きにけり  
花咲けりそのきさらぎのもち月に

春光に月山の裾はるばると  
春疾風最上の鐵橋陽に光る

大地主の嫁さんくれる春野菜

弘子 (堅・亜)

全 (紀・龍)

一灯 (万・恭)

正明 (紀・三)

和夫 (紀・隆)

亜也 (清・灯)

天牛 (弘・正)

盛雄 (紀・孤)

全 (万・青)

そらお (隆)

清 (忠)

紀久男 (万)

猛 (忠)

全 (恭)

全 (清)

孤舟 (万)

五郎太 (万)

弘子 (恭)

健介 (隆)

惠洲 (く)

全 (孤)

ゆたか (忠)

全 (恭)

一灯 (亜)

正明 (堅)

全 (三)

規雄 (龍)

亜也 (忠)

全 (允)

全 (青)

天牛 (弘)

●次回青葉会

四月二十五日(木) 午後六時〜九時 (丸紅 談話室)

▲当季雑詠五句 投句二句

五月二十三日(木)

六月二十七日(木)

以上 文責 紀久男

平成二十五年三月句会報

一 今回は12名出席。投句9名。猛さんの進行役で順調に推移。御覧のように孤舟さん、堂哉さん、五郎太さん、一灯さんが好成績でした。

先生からの桜葉入りのカステラとチョコ、正明さんから純米「光武」(佐賀)、小生の「越乃寒梅・別撰」そして大阪土産鮎子の自家製釘煮(市橋伸彦さんから)、ビール・料理をどんどん追加。陽気の加減もあり大いに盛りまりました。

話題は社長交代、日経掲載のシリーズ広告、伊丹句会、天牛さんの回復状況、和夫さんの転院等でした。久しぶりの孤舟さんは、昼に慶應のOB句会「丘の会」に参加されたそうです。

二 関係者近詠

祖母のため日めくり探す歳の市  
水戸つぼの恩師が仕切る鮫鱈鍋  
われからへおめでたうさん初鏡  
花びら餅病む膝そつと遊ばせて  
それぞれの実家には在り屠蘇の杯  
家人だけの三日となりぬ朝の風呂  
胸に来て胸に匂へり冬至柚子  
ゆく年や革砥の下がる店の奥  
正体の煮解けてよりの鮫鱈鍋  
初富士や先頭箱根へかかるころ  
寒の冷え八十路身近になりにつけり  
新年会東京駅も改まり  
吾妻山咲きて菜の花あふれさう  
雪の日々色とりどりの医療する  
乗るバスに老人ばかり初詣  
地に描いた顔へ葉つばの福笑ひ  
音羽屋の撒き手拭受く春着かな

―「萬緑」四月号―

ゆつくりと風車の廻りチューリップ  
うすぐもる空のどこかに雲雀かな

万里子 春の雲パイプにも見え入れ歯にも  
全 春風や目汁鼻汁溢れ出る  
全 目を見張る動体視力初燕  
眞希子 毎日新聞「兵庫文芸」3月27日 和田悟朗選  
全 汚れなき大地に一礼大根蒔く  
全 尼崎芸術文化協会1月15日 小泉八重子選  
弘子 今日明日が決意の時ぞ残り鴨  
全 荒くれの鶉ののさばれる春の昆陽  
全 赴任する子と酌み交す雛の夜  
全 夜桜の女性の背に物の怪が  
全 春風駘蕩明石大橋伸縮す  
全 冷えびえと青ざめてゐる桜かな  
全 ゆる春や人無きベンチのうすほこり  
和夫 東西の匂友伊丹に花見酒  
全 潤む目や春一番に背を向けて  
忠彦 元祿の遺構の辺り花菫  
全 伊丹昆陽池句会3月27日  
紀久男 句会後の夕食会（長寿蔵）に堅さんが手打ち  
全 蕎麦を持参。高島常正さん、市橋伸彦さん交えて  
全 「白雪」の超特選を堪能しました。

三 小沢昭一「俳句で綴る変哲半世紀」岩波書店2012/12/20 ￥2,600  
昨年12月10日亡くなつた小沢昭一の四千句余りを収録。小生発刊時に図書館から借り一気読み。  
すこぶる面白く昭和同世代の共感を呼びます。盛雄さん恵洲さんも推賞。プロの俳人までが朝日、  
日経で絶賛。黒田杏子に至つては「その人生の鉄人には民間からの『国民栄誉賞』がふさわしいと  
思うのですが如何でしょうか」…全く同感です。小生好みの句を抄出してみました。

スナックに煮凝のあるママの過去  
仲見世の裏抜ける癖そぞろ寒  
ステテコや彼にも昭和立志伝  
春を待つ路地の灯や河東節  
湯上りや生きていりやこそ初鯉  
旧友の知らぬそぶりや冬ざるる  
病む妻へ餅を小さく切りにけり  
変哲忌鱈のひらきを供えかし  
小さんらしきラジオ聞こえて春炬燵  
円生の水洩すする仕種かな  
彦六の笑わぬ顔や初笑ひ  
雪の夜は廓嘶を志ん生の  
春の夜の悋気ばなしや文楽師  
蓮玉の天ぶら蕎麦や花疲れ  
原発を拒みつつけて枯野なる  
茶のほうのしかるべき家松手入れ  
寒釣りや同じ顔ぶれ同じ場所  
久保万の一幕物の涼しさよ  
寒紅や音羽屋夫人客と笑む  
まだ尻を目で追う老や荷風の忌  
寒月やさて行く末の丁と半  
もう余祿どうでもいいぜ法師蟬  
落第や吹かせておけよハーモニカ

川の字や昭和も蚊帳のありし頃  
幕切れの桜吹雪や柝のきざみ  
永き日やハチ公に降る非戦論  
虚と実のあわいの稼ぎみみず鳴く  
春眠の永眠近く日の昇る  
父チャンの祭ヨと急ぐ九段坂  
鱧五郎海の汚れを目で怒る  
寄席の裏宵で臆で糸の音  
薄き灯に宿題をやる夜店の子  
田植え終え祖父本懐の心不全  
少子化の空年金の初幟  
何はさてガン告知の夜のとろろ汁  
鳥の巢のあるらし旅の楽屋かな  
すり生姜のせて病母へ出すうどん  
若桜と呼ばれし恨み観桜せず  
なにはさてあと幾たびの晦日蕎麦  
トマト一ツ残る就活四畳半  
五月晴れ第二志望で孫合格  
陰干しの月経帯や猫の恋  
極月や手配写真も顔なじみ  
めでたくもまたこの顔ぶれの初句会  
オイそこはガラスじやないか夏の蝶  
長閑なり病父の唄うのん気節

四月十二日

紀久男記